

第7回ふるさと自慢写真コンクール 講評

◆猪島 郁（熊野新聞記者）

今回は山海の自然景観に秀でた地域性を捉えた作品が、審査にあたった部会員のみなさんの注目を集めたと思います。

上位8点のうち、名勝・那智大瀧の最上流にある三の瀧の作品は、川の右崖面を伝うように苦労して移動してやっと見えた、まさにその瞬間の光景が上手に捉えられています。「第一印象の素晴らしさ」がありのままに伝わってくる点で一番の評価をしました。

口色川集落の景観は県道那智勝浦本宮線から見下ろしたのですが、紀伊三千峰の中にたたずむ集落の群像は那智勝浦町ならではの光景。棚田も色川地区の象徴的光景ですが、自然と棚田と人里の一体感が伝わる作品を選ばせていただきました。

太田川にかかる吊り橋は太田出張所前からやや上流にあり、県道那智勝浦本宮線からは木立の隙間から臨むことができます。逆に言えば気付きにくいレアな光景ですが、それをいい具合に見ることができたときの空気感と感動がほのかに伝わってきます。

以上3作品を特に評価させていただきました。

残念ながらこれら三作品の光景は台風12号により大きな被害を受けてしまいました。三の瀧自体は無事でしたが、滝つぼ周辺の様子はがらりと変わりました。口色川区は左方向から来た土石流が写真の道路にそって流れてしまい、集落に大きな被害が出ました。南大居の吊り橋は太田川の増水により、架線は残るも板が流されて今は渡ることができません。

修験者（山伏）でもある那智山青岸渡寺副住職、高木亮英氏の言葉を借りれば、三の瀧はあるがままの自然による変化だと受け止めるべきでしょう。しかし人の生活にかかわる口色川の集落や吊り橋は、これからもこの場所で暮らしていくために復興しなければなりません。

みなさんがふるさとの誇りと感じている素晴らしい光景が、コンクール本来の目的である観光客などへのPRにとどまらず、被災されたみなさんへの復興の励み、そして私たち全員の「次の世代が大好きな光景をみんなで取り戻すんだ」というやる気につながっていくことを願い、講評とさせていただきます。

◆大井 千穂（紀南新聞記者）

子どもの目線の作品がもう少しあるといい。

今回は観光客が見てほっとしてもらうことを一番に考えて選びました。

◆須磨 伸一（熊野新聞記者）

『特選』 高津気の棚田

美しい棚田の曲線が、画面一杯に大きくとらえられていて良い。
民家も映り、人の営みを感じられる。

『特選』 ぶつぶつ川

澄んだ水のきらめきが清々しい。ひしゃくが入っていることで、
生活用水であることがわかるのも良い。人の気配がある。

『特選』 那智勝浦町 口色川

画面中央の集落（民家）が、山と田の緑に囲まれている様子が美しい。
木々と稲の色の濃淡もあざやか。